第10回

DIOR
60年の品格と凄み

数々の名声を築いてきたディオールは、1996年より鬼才ジョン・ガリアーノの手に委ねられ、常にファッションの最先端に立ち続けてきました。60周年を迎えた今年は、ムッシュ・ディオールへのオマージュを込めた、現代的クチュールをモードで表現しました。

撮影／清水 尚　スタイリスト／橋本早苗　ヘア・メーク／ヒロ　取材・構成／柳武麻実

これぞパリの奥深さ

中野香織

服であれ仕事であれゴハンであれ、迷ったときの選択肢の一つに、「無難」がある。無難を選んでおけば、大きな失敗はとりあえず避けられる。

失敗がない。でも、感動もない。そんなつまらない無難路線を蹴散らし、冒険する楽しさを教えてくれるブランドが、ディオールである。

1月に行われた、春夏パリ・オートクチュールコレクションでも、無難からもっとも遠く、本気で遊んでいたのが、ディオール。就任10周年の現デザイナー、ジョン・ガリアーノは、島田髷に扇子や提灯をさしたヘッドギア（?）をかぶった白粉メークのモデルを登場させ、ガリアーノ流「マダム・バタフライ」像を炸裂させる。見たことない！　ありえない！　過剰！　ありとあらゆる「！」に胸は高鳴り、気がつけばディオールのとりこ。コレクションの役割とは「着られる」無難な服を提示することよりも、むしろ従来ありえなかった鮮烈なイメージで観客の感情をかきたて、心をわしづかみにすること……と心底納得させてくれるのもまたディオールである。

創業者クリスチャン・ディオールからして、「ニュースになる」冒険で時代を引っ張ってきた天才である。服地節約を強いられていた1947年に、なんとたっぷりウールを使ったプリーツフリルのロングスカート。八の字ラインのそんな「ニュールック」でモードを変えたあとも守りに入ることなく、「Hライン」「Aライン」「Yライン」……と「ありえない！」テーマを次々と打ち出し、流行を創り続けて'57年に急逝。濃い10年間。

長く働くには、時に控えめな守りに入ることも「冒険」の一つかも。今春夏の、ガリアーノにしては珍しく抑制の利いた「バック・トゥ・ベイシック」なプレタコレクションは、そんなことまで思わせる。いずれにせよ、幅の広さはディオールの強み。「ガウチョ」バッグで冒険もアリならば、「レディ ディオール」での守りもまた楽し。守りさえ冒険に変えるディオール、無難にはなりません。

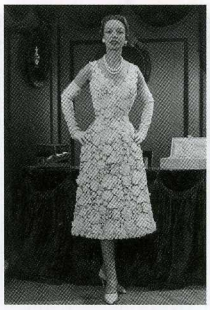
中野香織
服飾史家、コラムニスト。ケンブリッジ大学客員研究員を経て、執筆活動に。著書に『モードの方程式』『着るものがない！』など。

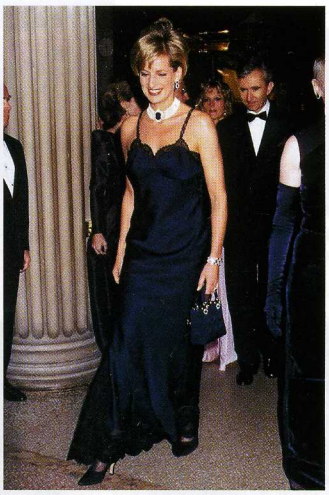
レディ ディオール進化中

「レディ ディオール」は1996年春夏コレクションで発表されて以来、シーズンごとに新色、新素材が登場する人気定番。DIORの切り文字がチャームポイント。〈上〉キルティングのカナージュ柄が、パンチングによってデザインされた。パウダーピンクのバッグ（縦20×横24×マチ11㎝）¥199,500〈下〉上品なフラワープリントがフェミニン。名古屋店限定です。バッグ（縦20×横24×マチ11㎝）¥162,750（ともにディオール／クリスチャン ディオール）

進化するブランドSTORY

服飾デザイナーとして活躍していたクリスチャン・ディオールは1946年に、オートクチュールメゾンをパリ8区モンテーニュ通りに構えた。翌年に発表したコレクションはニュールックと賞賛され、モード界に革命を巻き起こす。映画の衣装や、王侯貴族のドレスを手がけ、クチュールメゾンとして発展を遂げるが、'57年10月に急逝。イヴ・サンローランがアーティスティック・ディレクターに就き、'58年に〝Aライン〟を発表。'60年、サンローランが軍隊に召集され、マルク・ボアンが後を継ぎ、事業も拡張。'89年、レディスの主任デザイナーに、ジャンフランコ・フェレが就任。'95年9月にセザンヌ展を開催した際、オープニング・セレモニーに参加した故ダイアナ元妃に、シラク仏大統領夫人より最初のレディ ディオールのバッグが贈られ、大人気に。'96年、ジョン・ガリアーノのレディスコレクションのアーティスティック・ディレクター就任以来、若者の支持も集め、世界的なブティックネットワークを広げる。





〈上〉'96年12月、メトロポリタン美術館で開かれたDior50周年記念パーティでの故ダイアナ元妃。〈左上〉'06年10月のローマ映画祭でのモニカ・ベルッチ。〈左〉'57年、ムッシュが生前、発表したドレス〝Guipure〟。